



特集：震災と食



2017年度資料室企画展「1.17はじまりのごはん」を開催しました



▲企画展チラシ

「地震のあと、はじめて食べたものは何ですか？」

センターで活動するボランティアスタッフの皆さんにアンケートを実施し、1995年1月17日の地震後に食べたものをお尋ねしました。回答をもとに、当時の食べものを再現し、それを片手にインタビューと写真撮影に応じていただきました。22名分の写真とエピソードのパネル、震災時の食に関連する写真や一次資料として保管している缶詰も展示しました。

はじめて食べたものという質問には、かちかちのおにぎり、廊下でお湯を沸かして食べたカップラーメン、冷凍の切り餅、、、さまざまな回答が寄せられました。電気が止まっていてトーストできなかった食パンという方もいれば、トーストしたパンを食べてから被災地へ出かけたので、それ以降はまともに食べられなかったという方もいます。何が最初だったか覚えていないという方には、印象に残っている食べものを教えていただきました。

食べものからお聞きした震災の記憶。一緒に23年前を振り返っていくうちに、当然のことながら、地震の前から今も、私たちのくらしはつながり、続いていると感じました。



▲インタビューの様子▶



展示パネル▶



3月12日はじまりのごはん

—いつ、どこで、なに食べた？—

今回の「1.17はじまりのごはん」のタイトルは、宮城県のとてだいいメディアテークで2014年秋に初開催された展示「3月12日はじまりのごはん—いつ、どこで、なに食べた？—」からお借りしました。

震災時の「食」にまつわる写真を展示し、来場者がそれを見て思い出すことや体験を付箋紙に書いて共有する参加型展示で、とてだいいメディアテークのプロジェクトのひとつ「3がつ11にちをわすれないためにセンター(略称：わすれん!)」と「3.11オモイデアーカイブ(NPO法人20世紀アーカイブ 仙の震災アーカイブ)」との協働で行われました。

▼撮影コーナーも



みんなの「はじまりのごはん」

園児の保護者の中には都心まで勤務している方がおり、見通しのつかないお迎えまでの間に普段は提供しない夕食を給食として出す必要がありました。昼の給食後で当日は金曜日のため、食材のストックがあまりない状況でしたが、電気・ガス・水は無事、そして米は沢山あったので、急遽おにぎりを提供したそうです。

保育園児には食物アレルギー児も多数おりましたが、幸い、米アレルギーの園児がいなかったため、園に残っていた子供全員に提供することが出来たと聞いています。夜中にお迎えに来られた保護者の方からは大変感謝されたそうです。

2011年3月11日 千葉県の公立保育園

前震があった4月14日は、出産した病院に入院中でした。地震後は病院の近くの駅舎で一晩を過ごし、朝早くに病室に戻った後、朝食の提供がありました。地震の際には食器が割れる音が何度も響いていたため、ちゃんとした食事が食べられることに驚き、ありがたかったです。メニューはおにぎりとお味噌汁に副菜もついており、普通の食器で提供されました。

病院には私の子も含め5人の新生児がいましたが、母乳育児を推進する病院だったため、粉ミルクが必要な子はおらず、「母乳育児でよかったでしょ」と院長先生が言っていたのが印象に残っています。15日に予定よりも1日早く退院し、自宅に戻りました。自宅は特に被害がなくライフラインも問題なかったのですが、16日の本震では電気・ガス・水道ともに止まってしまいました。冷蔵庫が使えなくなったため、牛乳を消費できるようにその日の朝はシリアルを食べました。

2016年4月 熊本市

企画展では、来場者のみなさんにご自身の体験を書いていただくコーナーも設けました。

今回は、この紙面のために寄せていただいた東日本大震災と熊本地震での体験をご紹介します。



地震が起こってから、深夜に小学校へ避難したのでとても混乱していたのを覚えています。おなかのすくという感覚もなかったのですが、朝方に（市役所の人から？）市販のパンが配られたように記憶しています。被災してすぐは、食料も少なく近くのコンビニも軒並み商品がなくなって食べるものに少し苦労をしたな、と覚えています。避難所で配られるものも、当初は「お年寄りと子供がいる家庭から」と言われ我が家は成人2人だったので遠慮していました。

地震後初めて食べたものは、市販の菓子パンです。お隣の家族連れが、毎回貰えずにいるのを見かねてくれました…。その後、16日の夕方には会社の同僚が手作りのおにぎりを届けてくれたのを覚えています。

2016年4月 熊本市中央区

関連写真展 震災時の食料事情

展示に使用する写真を探していくなかで、テーマにした4つの項目「商店」、「水」、「救援物資」、「炊き出し」は、震災時に日常生活（特に食生活）を営む上で影響があったものだと思います。

せんだいメディアテークの方がご来場の際、物がなくなったスーパーの写真や、自衛隊による給水支援の写真について「東日本大震災の写真と言われても違和感がない」と仰っていたのが印象的でした。熊本の方の手記にも「コンビニも軒並み商品がなくなって」とあり、阪神・淡路大震災から23年が経過した今でも、地震後の状況にそれほど変わらない部分があることを感じます。

炊き出しの中に寿司類があったことは驚きましたが、『震災下の食－神戸からの提言』（NHK出版、奥田和子 1996年）によると、阪神・淡路大震災での炊き出しメニュー食数トップ10のうち、寿司は8位になっています。ただし最近では衛生面への配慮から、炊き出しでの生ものの提供や、素手での調理(おにぎりも含む)を避けるよう指示する自治体もあります。

そのほかに、沖縄そばや、山口のふぐ鍋、香川のさぬきうどん、青森のりんご等、さまざまな地域から特徴を生かした炊き出しや救援物資の支援も寄せられました。展示パネルの語りの中には「生ものが貴重だった」というお話があり、被災者の置かれた状況への思いやりの心があったのだと考えられます。



▲「スーパー店内」 永木仁平 4700390-001001



▲「にぎり寿司・ぜんざいの炊き出しの様子」
大和公園仮設住宅 0000050-001006

過去の地震における食料救援

安政江戸地震 安政2年10月2日(1855年11月11日)発生

ペリーが再来航した翌年、江戸周辺を大地震が襲いました。町人だけでも4千人以上が亡くなっています。安政元年には南海トラフ巨大地震のひとつとされる安政東海地震・安政南海地震も起きました。

当時19歳の町奉行所与力佐久間長敬による回想録「安政大地震実験談」には、当日から翌日にかけての彼の行動が克明に記されています。それによると、当日夜の町奉行所の評議で罹災民への炊き出し（握り飯）が決定しました。翌日の市内巡見中には、町会所での握り飯の配布、地主から店子への握り飯の支給、家が無事だった者による炊き出しを目撃しています。

佐久間青年が見た町会所配布の握り飯には梅干しと沢庵がついていました。



関東大震災 大正12年(1923年)9月1日発生

ちょうどお昼時に大地震に襲われた東京周辺では、折からの強風もあいまって火災が大規模に広がりました。死者・行方不明者は10万人以上になります。

被災した主婦松本ノブの手記には、彼女が2人の子どもを連れて故郷へ帰るまでの出来事が記されています。それによると、当日の夜に行った小学校では、ひとりにひとつずつ握り飯が配られていたそうです。また、避難所になったお寺では玄米が支給されていましたが、乳幼児の分も配られたため少し持て余し気味だったとか。

褒章のための調書には、発災の翌日に燃え続ける市中をくぐり抜け埼玉県で米を調達して帰った男子学生について書かれています。火災で交通が制限され、食料の確保は容易ではなかったことがわかります。

避難所生活でお乳の出が悪くなったノブさん、配布された練乳でしのいだとか。当時は母乳のかわりに練乳を与えることがあったそうです。



昭和三陸地震 昭和8年(1933年)3月3日発生

午前2時30分に三陸沖で発生した地震での被害はそれほど大きくなかったものの、直後に発生した津波によって多数の被害が出ました。死者・行方不明者は3千人以上です。

岩手県庁の記録誌によると、午前10時には最初の物資調達・配給計画を立てたものの、積雪や線路の被害等のために思うように進まなかったそうです。調達する地点を変更したり、応急復旧工事を行ったり、八戸市市長の斡旋で船を雇ったりしながら、当日午後3時までに各被災地への1回目の輸送を完了しました。現在では各自治体が平時からこのような計画を立てて、災害時に備えています。

岩手県が調達した食料には、米や缶詰と並んで乾パンが含まれています。軍用の非常食として開発された乾パン、西南戦争で既に採用されていました。



過去のスポット展示をwebで公開しています！

震災資料語り
～ものがたり～



震災資料がもつストーリーと当時の関連情報をあわせて所蔵資料を紹介する「震災資料語り～ものがたり～」を昨年よりセンターのホームページで公開しています（詳細は前号でご紹介しています）。

西館3Fの展示フロアで行っているスポット展示「震災資料のメッセージ」で紹介してきた資料も、精細な写真で見ることができます。

「食」をテーマにお送りした2015年度の震災資料のメッセージの内容も、4つの小テーマ（水、救援物資、炊出し、食卓）に分けて掲載しています。ぜひご覧ください。

URL : http://www.dri.ne.jp/exhibition_materials

新規受入れ資料紹介

後藤佑介さん資料

資料の寄贈にあたり、センター上級研究員の小林郁雄さんに文章をお寄せいただきました。後藤さんの資料は小林さんの資料の一部として登録し、公開する予定です。

後藤祐介さん（1942年2月21日大阪で生まれ、2017年9月3日西宮で没）は、大阪市立大学大学院、Team UR、株式会社都市・計画・設計研究所と、長年にわたって私の都市計画・まちづくりの先輩で、20代から30代にかけて、まさに寝食を共に過ごした兄貴分であった。

1980年に株式会社GU計画研究所を設立独立され、神戸、阪神間のニュータウン開発、既成市街地整備など都市計画プランナーとして活躍、阪神大震災以降は被災建物調査はじめ復興市民まちづくり支援ネットワーク活動、神戸・芦屋・西宮各地の復興計画などに尽力されてきた。とりわけ西宮市の西宮北口駅北区画整理・安井地区計画、芦屋市の若宮住環境整備、神戸市の東部市街地復興など主に白地地域の震災復興に多く関わってこられた。

今回寄贈された神戸市関係のまちづくり資料は、震災前から長期にわたって神戸市東灘区深江・岡本・青木南地区、灘区新在家地区など、まちづくり協議会が震災を挟んでどのような活動を行い、まちづくりコンサルタントがそれらに対してどのような役割を果たしてきたか、詳細にわかる記録が年別のファイルとしてキッチリと整理されている。

3年ほど前に、35年ほど続けて来られた事務所を整理縮小され、こうした神戸市関係の資料は私が手伝っている神戸まちづくり会館まちづくりライブラリーでお預かりしていたものである。昨年9月に急逝されたため、後藤さんに結果が報告出来ないのが残念である。

小林郁雄（人と防災未来センター上級研究員）



▲建物被災調査(学会調査)の地域分担調整会議
(95年1月30日西宮市庁舎にて)中央帽子が後藤さん

川村英子さん資料

震災当時板宿小学校の教員をされていた川村英子さんが、資料を寄贈して下さいました。板宿小学校が位置する須磨区は地震で大きな被害を被り、避難所となった同校には、最も多い時で2000人以上の人々が避難していました。避難者は各教室・各階廊下などの単位で100人程度に班分けされ、地域の若い男性が班長となって、まとめ役の市職員と避難者のパイプ役を担いました。1500人以上が避難する中、音楽室などの特別教室3室を使用して2月6日に授業が再開されましたが、8月21日に避難所が解消されるまで、避難者と児童が共存する状態で学校生活が営まれることになりました。



寄贈して頂いた資料には、震災時に学校関係者が作成された避難所の記録や班長会議の議事録、避難所通信、学年だよりなど、緊急事態の中で多くの人々が「教育の場」と「生活の場」を両立させるために尽力していたことが伝わってくる、貴重な資料が含まれています。

当センターは、その他にも板宿小学校から寄贈して頂いた『阪神・淡路大震災－板宿小学校・避難所の記録』や学校及び周辺地域の写真、同校に宛てた他府県の児童からの手紙などを所蔵しています。併せてご覧頂くことで、当時の状況をより詳しく知ることができます。

ひとぼう資料室Facebookページ*お知らせや日々のできごとを随時更新中！

*Facebookページは、FBアカウントがなくても閲覧できます。 <https://www.facebook.com/dri.archives/>



震災資料をお持ちの方に

人と防災未来センターでは、現在も震災資料の収集を続けています。
震災後、すぐには手放せなかったものの、震災の出来事を伝えるために活用したいとお考えの方は、ぜひ一度資料室までご相談ください。



(公財) ひょうご震災記念 21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター資料室

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 人と防災未来センター西館5階

TEL 078-262-5058 FAX 078-262-5062

URL <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30~17:30 (展示施設とは時間が異なりますのでご注意ください)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日又は振替休日の場合は翌平日)

12月29日から1月3日



資料室は無料で
ご利用いただけます

